# 中央アフリカ共和国の旅(6)
## ～最　終　回～

小村幸二郎

### バクウマにて

バクウマの町からウラン鉱床開発基地まで　およそ10 km の間には　大型トラックが楽に通れる立派な道路がある．　この道路は　ウラン鉱床が発見される以前にはなかったに違いない．　その頃　この地域の50万分の1地質図幅を作成するため　現地調査に従事していたフランスの地質学者の苦労は並大低ではなかったろう．　地質図幅を作成するための野外調査に従事することが責務であったにちがいないその地質学者が　もしも　放射能測定器を常時携行していなかったならば　このウラン鉱床の存在は現在もなお発見されていないかもしれない．その地質学者の心掛と努力とに讃辞を送りながらも　この鉱床の開発を行なっていた鉱山会社の解散とともにフランス人技術者が追放されていたという　驚くべきニュースを聞いていただけに　一切の開発業務が休止されて丁度1カ月後にこの開発基地および鉱石採掘場を視察に向う私の胸の内は　決しておだやかではなかった．会社が解散して探査　開発業務が中止されたために　フランス人技術者が帰国したというのならば理解することもできるが　追放されたとなると事は重大である．

赤と白に塗り分けられたゲートを番兵に上げてもらって入った広々とした開発基地は　人影はまったく見当らず　あくまでも静まり返っている（第2図）

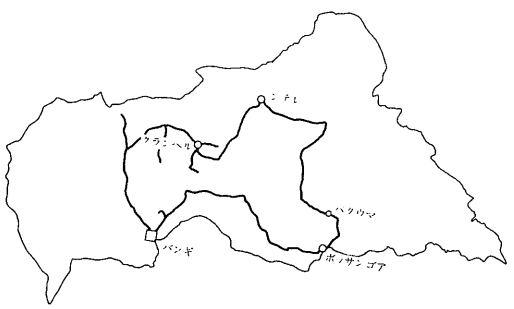
基地からやや離れた丘の斜面に建つ家に案内され　この基地を警備している軍隊の司令官に紹介された．　この家はフランス人技術者達の娯楽の場であったのだろう家の中には　2台の大型冷蔵庫　200冊ばかりのフランス語の小説　レコードプレーヤーと数10枚のレコード若干の遊技道具などが残されていた．　屋外のベランダらしい所に赤　黄　緑　青などに着色された裸電球が吊下げられているところをみると　1カ月前までは　この家の中も外も　夜ともなれば　美酒に語り　そして　楽の音に踊る人達できっと賑わっていたにちがいない．

そう思えるだけに　主の居ないこの家のたたずまいは一層わびしげである．

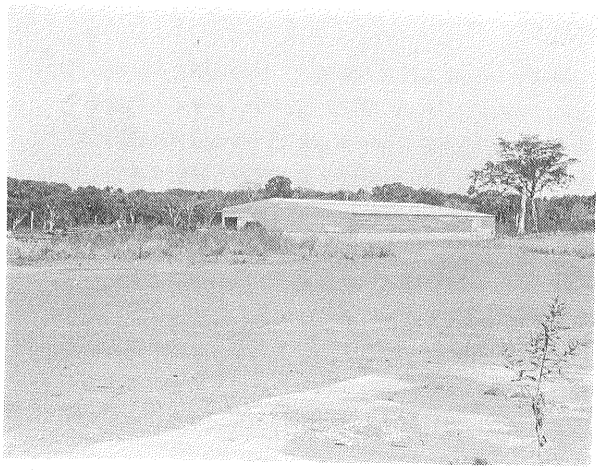
小休止の後　採掘場へ向った．　そこへの道は　1カ月前まで人や車がしげく通っていたとはとても信じられないほど　草におおわれ　ムパトウ川の涸れ果てた支流に架かる橋は無惨に崩れ果てていた．

1973年の製錬開始を目標に探査・開発業務が積極的に行なわれていたと聞いていた私は　この現場を訪ずれるまでは　多くの場所で　大規模の採掘が行なわれていたに違いないと想像していた．　しかし　事実はその想像とはまったく異なって　採掘場は1個所　しかも　その採掘場は地表下2m 付近まで完全に水没していた（第3図）．　3月といえば乾期であり　採掘場のすぐ近くではムバトウ川の支流が川低を汚ならしくむき出しにしているというのに　この地下水面の高さはどうしたことだろう．　鉱床がこの地下水面付近から100m ばかり下部までに賦存していることからみれば　この鉱床の採掘は容易ではなさそうである．

はるばると訪ずれてはみたものの　露天掘跡の垂直の



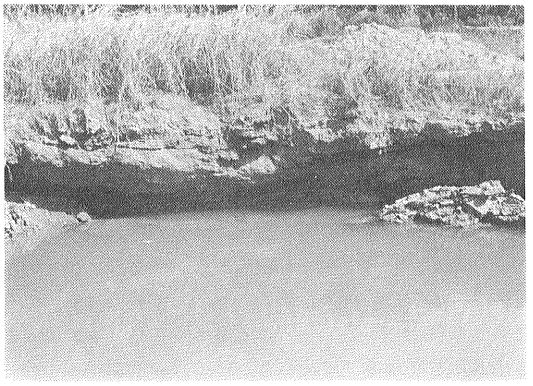

第1図　調　査　行　程　図



第2図　バクウマウラン鉱床の開発基地　　密林を切り開いた広大な敷地にはこのような大きな家が建ってはいるが　まったく物音がしないだけに一しおわびしいたたずまいである

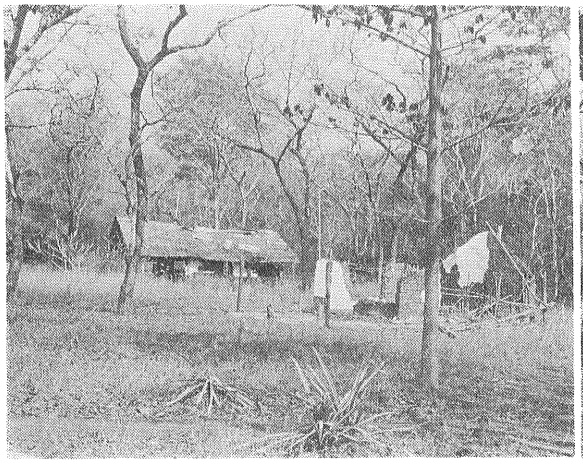
壁と深さ4mばかりの水に阻まれて　遂に　鉱床に手をふれることさえできなかった．　採掘はこの露天掘跡から漸次広げられる計画だったらしく　付近の密林は大よそ40,000m²にわたって伐採され　その片隅には　5種類ばかりに区分けされた貯鉱があった（第4図）．　その鉱石に手を触れた時　確かに　嬉しくはあったが　半面空しさのようなものをも感じた．

とくに見るべきものもなく　少量の鉱石試料を手に入れて間もなく　はじめに休息した家へ戻った．　同席のバクウマ郡長や警備の軍人は　この鉱床が大々的に開発され　そして　経済発展の当面の基盤を鉱物資源の開発においているこの国に大きく貢献できることを心から喜んでいたにちがいない．　しかし　その喜びは　開発会社の突然の解散という事態を迎えて　1カ月前に．　悲嘆に変わった．　栄枯盛衰は世の習いとはいえ　植民地として忍従の生活を余儀なくされてきたこの国の人達にとっては　このウラン鉱床が経済発展の偉大なカンフル剤になると信じられていただけに　開発の中心的存在であったフランスに対する怒りが一層激しくなったとしても不思儀ではなく　フランス人技術者の追放というニュースも真実を伝へたものと思われる．　もしも　「鉱床とは経済的に開発できる品位と量とをもつ鉱石の集合体である」という智識を　フランスがこの国の人達に教授していたならば　こういう言葉使いのニュースは報導されなかったのではなかろうか．　もっとも　植民地政策は　力を十分に駆使し　また　或程度以上の教育をさせないという前提でなければ　実現しないのかもしれない．しかし　心に勝る武器はないと考える私は　胸襟を開いて何事も腹蔵なく話し合い　そして　急速に変貌し続ける世界の時流に適合したすべての態勢を育て上げた時国と国との真の心の通い合う永遠の関わり合いができる



第3図　ウラン鉱床露天掘り跡　　乾期中もこの程度の湧水があり採掘を困難にしている　　水面から下部が白色粘土質の鉱石その上部地表までは　酸化鉄で固められたキュラス（1.5～2.5m）　採掘跡の深さは　6m前後　直径15m前後である

第4図　バクウマウラン鉱床採掘現場（第3図）近くの貯鉱鉱石は5種類ぐらいに区分けされていた　　中央の鞄を持っているのは　開発基地警備司令官



第5図　バクウマウラン鉱床開発基地の住宅　　訪ずれたのは開発業務中止後およそ1カ月であったが　ほとんどの家がこのように崩落していた

第6図　バクマウラン鉱床開発基地の住宅　　住宅としては立派に見られるが　無人の故か　内部は崩れ落ちていた

と思う.

開発基地の周辺には　技術者や労働者が生活を営んでいたらしい家が点在している.　そうした家のほとんどが　今は　主を失ない　崩れ落ち　その家で人が生活を営なんでいたことが遠い過去の出来事であったように変り果てていた（第5　6図).

この国の誰もが開発を待ちわびていたこのウラン鉱床の片鱗を見せてもらった私は　ほんの一時を現場で過したにすぎないが　様々のことを深く考えさせられた.
しかし　仮りに　自分の浅い知識と拙ない技術とがこの鉱床の探査や開発にいくらかでも役立つとしても　それは　あくまでも　自分自身の自問自答の枠内のことであり　他国が開発権利を所有している財産に口出しすることは差控えた方がよさそうである.

点在する朽ち果てた家の近くで　大型のショベルカーが錆びはじめていた（第7図).　この機械が再び活動するのはいつだろう.　ふと　コットウ川の流れに身を投げ入れて私達を渡してくれた男達の姿が脳裏に浮んだ.
バンギを出発して以来ここへ辿り着くまで　多くの人々の善意はどれほど私達を救ってくれたことか.　せめてこのウラン鉱床の開発に役立つアドバイスができればそうした人々の善意に多少は報いることもできるのだろうが　今はそうすることさえ容易でない事情がある.

それにしても　バンギを出発する以前に　この付近の地質鉱床に関する資料を見せてもらえなかったことが残念でならない.

この国最大の鉄鉱床の所在地として知られているボゴアン出身の郡長から　夕食の招待を受け　7時に　郡長邸を訪れた.　ビール　ワイン　肉を主とする数々の料理が　特大のテーブルの上に　隙間もないほどに並んでいる.　異様な臭で酸っぱい主食のマニオクには　この国へ来た直後はあまりなじめなかったが　調査旅行に出てからは時折食べるので　この頃にはもうすっかり馴れていた.　それを知ってか　テーブルの上には　自家製のパンと並んで　美味そうなマニオクが添えてあった.
「コビ　ソウ　ア　ンザレ　ミンギイ（この料理は美味しいですね)」と云いながら　マニオクをはじめ　すべての料理に舌鼓をうつ私達を見て　郡長夫妻はいかにも満足気であった.　県知事さんや郡長さんのこうしたもてなしを　これまでにも　何度か経験した.　そうした時に出される料理のすべてが夫人の手料理であり　味付も幾分異なっていた.　材料も調味料もきわめて乏しいはずなのに　こうした料理の美味さは格別だ.　心からのもてなしは　やはり　料理を美味くするものらしい.
思わず時のたつのを忘れた.

第7図　バクウマウラン鉱床開発基地の一隅に放置されている車輛と崩落した家

むし暑かった昨夜とはうって変って　肌寒さをおぼえる朝である.　午前5時30分　ジュル爺さんもまだ起きていないらしい.　東の空がようやく白みはじめた.
この国へ来てから陽の出を見ることが少なかったので散歩をかねて　陽の出を撮影に出かけることにした.

意外に乾いているらしく　歩く度に　堅い足音だけが返ってくる.　泥壁に萱葺きの家がぽつんと建っている.
マンゴの葉も椰子の葉も　深く垂れて　まったく動こうとしない.　果しもなく打続くサバンナを控えたいかにもアフリカらしい雄大な風景に見入っているうちに　椰子の葉蔭に太陽がのぞき　みるみるうちに　その姿をむき出しにしてゆく.　山らしい山のないこの付近では夜から　突然に　昼間に変るように　夜が明けるらしい.
一瞬のうちに強烈な光の波に黒々と浮ぶ萱葺きの屋根と椰子をカメラに納めているうちに　バクウマの町も　眠りからさめたらしい.

宿舎に帰り着くのとジュル爺さんが起きてくるのと一緒だった.

「バラオ　パトロン（お早うございますパトロン)」
「バラオ　ミンギイ　ジュル（お早うジュル)」
「デイ　ア　サラ　ミンギイ（とても寒いですね)」
「デイ　ア　イエケエ　サラ　ムビ　アペ（寒くはないよ)
　ムビ　イエ　ボオウラオウ（私は新鮮な空気が好きなんだ)」

ジュル爺さんは　にこにこ顔で　「サンゴ　テイ　モウ　ンジョニィ（貴方のサンゴ語は素晴らしい)」と賞めてくれた.

朝食を終え　郡長夫妻に挨拶を済ませて宿舎を後にした.　午前7時30分　町の中央にある露天市場では　食

料品を主とする商いが　とっくにはじまっていた．　10才ぐらいの坊やが揚げパンを売っている．

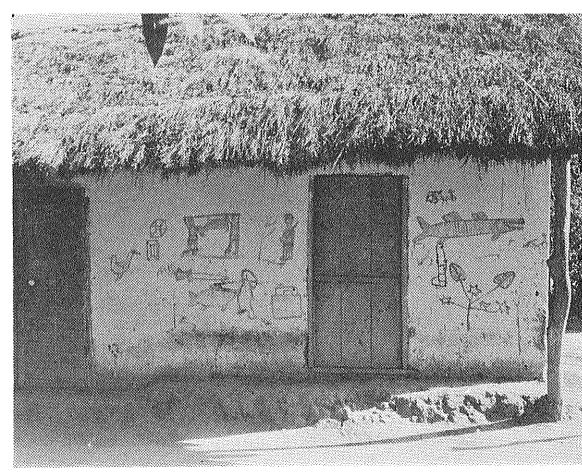
「ングウイリ　ニ　アキ　オキ（これはいくら）？」
「オコウ　フラン（5フランです）」
「ムビ　イエ　バレオコ（10個欲しいんだが）」

私は　オコ　ウセ　オタ　ウシオ　オコウ　オミイネ　バツサンバラ　ミイアンベ　ゴンバイヤ　バレオコと一つづつ数えながら　ポリエチレン製の試料袋に　揚げパンを入れた．　そして　袋の口を閉じようとしたとたんに　その少年は　「バレオコ　ナ　オコ(11)」と云って　1個おまけしてくれた．　だが　緊張しているのかその顔は笑ってはいない．　私は　少年の膝元にある小皿の中に　5フラン硬貨が3枚しか入っていないのを見た上で　100フラン硬貨を差出した．　もちろん　50フランの釣銭があろうはずがない．

この市場の近くに建っている小さな家の白壁に　小画伯の傑作が画かれていた．　秀れた画とは決して云えないが　単調すぎるほどのその線画は　何かを　考えさせる（第8図）．いわゆる発展途上国の奥地でしばしばみられるこのような壁画には　富への憧がれの象徴か生活そのものが画かれていることが多いものだが　この画は後者に属するのだろう．　私は　大家が画いたわけの分らない画よりは　こうした簡潔で飾り気のない画の方が好きだ．
バクウマの東端部に近い民家の前で　停車した．　薄闇い家から出て来た老婆が　二つ切りにしたヒョウタンに入れたパイナップルを　私達にすすめた．　新鮮なパイナップルの甘酸っぱい汁が　乾きはじめた喉を潤ほしてゆく．　実に美味い．　老婆の後から出て来た小ざっぱりした服装の若い女性は　バンガツソウまで便乗するらしく　私の隣に乗込んできた．　そして　同行の1人は運転席の屋根へ上った．　女性をいたわる気持が分らぬではないが　それにしても　親切すぎるような気がしないではない．　私は　間もなく　余りにも睦まじいこの2人に　少々興味をもちはじめた．

時折　隣席の女性にあやしげなサンゴ語で話しかけてはみたが　バンガツソウに到着するまで　その女性は遂に　一言も相槌をうってはくれなかった．　どちらかといえばおしゃべり好きのこの国にも　この女性のように　無口な人が居るものらしい．
この女性の正体は　それからしばらくして　判った．やはり　運転席の屋根に上った男の嫁さんだった．　しかし　不思儀なことがあるものだ．　この男は　バンギ市の郊外で　夫人や子供達と生活している．　しかしこの疑問は間もなく解けた．　洩れ聞くところによるとこの国では　結婚を約束して女性側が男性側から結納金を受取ると　たとえその男性が他の女性と結婚したからといって結納金を受取った女性は　その男性が了承しないかぎり他の男性と結婚できないばかりか　その男性の意に沿った生活を余儀なくされるらしい．　要するに男性は重婚ができるということのようだ．　われわれの常識では中々理解できないことだが　世の中はやはり広い．　そういえば　アジアのある国には　兄弟が1人の嫁を共有するという風習さえあると　聞いたことがある．

バンガツソウへの道は　バクウマの東方約12kmのリンゴ部落から　ムバリ川と樹枝状に発達するその支流一帯に拡がる密林地帯へ入ってゆく．　洩れ陽に光る美しく深い緑の地は　野生動物にとっては格好の棲息地にちがいないはずだが　腹をえぐるようなエンジンの響に怖れてか　猿さえも姿を見せてはくれない．
デイングウイソウ部落で19号線に別れ　南への道を辿る．　19号線をさらに東へ行くと　ダイヤモンドや砂錫の分布地帯に入るのだが　時間の都合で南への道を辿ることにしたため　これらの鉱床を見る機会を失なうことになった．　この国へ来ることに決った時点で　何としてでもダイヤモンドの採掘現場だけは見学しょうと秘かに願っていただけに　甚だ残念ではあるが　これでもうダイヤモンドの採掘現場を見ることはない．　妙に打ちひしがれたような気持でラテライトの道を見続けているうちに　車は　バンデイグウイ川を突切り　ゆるやかに起伏する丘陵地帯をひた走って　ムバリ川のキチカの渡しに着いた（第9図）．



第8図　バクウマの町で見た壁画　　生活や富と直接結びつく家畜　魚獣　ダイヤモンド　ミシン　コーヒの木　ゴムの木などが画かれているが　どの画も幼稚なだけに考えさせられる

この渡し場付近のムバリ川の幅はせいぜい50mほどだが　動力付のフェリーがある．　あの大きなコットウ川のフェリーでさえ人力で動かされていたのに　こんな小さな川で　何故　動力付のフェリーが使用されているのだろう．　実に矛盾しているようだが　その違いは　ブリアとバクウマとの間の人と物資の輸送量がバンガツソウとバクウマとの間のそれよりも圧倒的に少ないか　または　渡し場が主要都市から遠いか近いかなどと関係がありそうだ．　この渡しを過ぎると　南へ進むにつれて道路のラテライトはますます赤くなり　人家が少しづつ多くなってゆく．　キチカの渡しを出発しておよそ1時間10分の後に　快調に走っていた車が　突然　左右に揺れだした．　パンクだ．　運良く　道路傍に　マンゴの巨木が広い蔭をつくっている．　その木蔭で修理が終るまで一休みしょうとした私の心をまるで見通したように一人の老人が　手製の椅子を持ってきてくれた．　見も知らぬ異国の人がほんの一時休憩する折にさえ　至極当り前のように　椅子を差出し　時にはマンゴやグレープフルーツやオレンジなどをすすめてくれるこの国の人達は本当に親切だ．

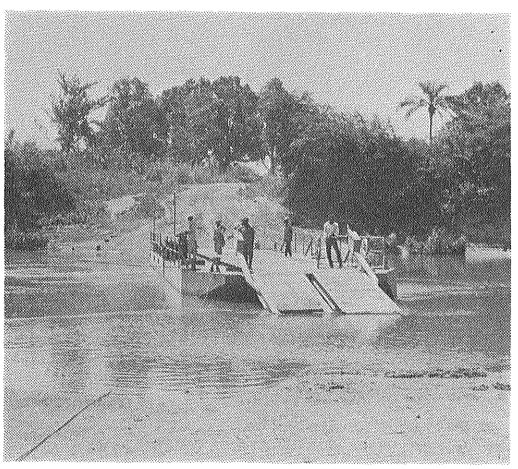
修理は15分ばかりで終った．　先へ行った車を追い15時近くに目的のバンガツソウに到着した．

バンガツソウは　東部地域では一番大きな市でありその人口は5万人といわれている．　コンゴ川に合流するウバンギ川は　この付近から上流はムボウモウ川と呼ばれており　その北岸に位置するバンガツソウは　この川を渡って　ザイル　スーダン　ケニヤ　ルワンダ　ブルンデイ　タンザニアなどの東アフリカ諸国への道路が通じている関係上　この国ではもっとも重要な市の一つである．　また　日本を含む先進諸国の経済的・技術的援助によって　開設または改修が計画されているアフリカ横断ハイウエイが完成すれば　バンガツソウは　一層重要な位置に占めることになる（第10図）．

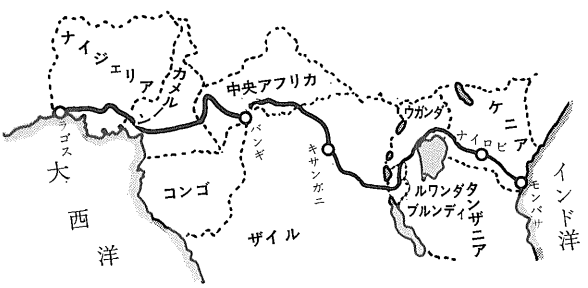
インド洋に面するケニアのモンバサから大西洋に面するナイジェリアのラゴスまでおよそ7,300km　8カ国を通るこのハイウエイ建設の目的は　単に道路を造って交通の便を計るというよりは　むしろ　8カ国の産業および文化の交流を促進し　かつ　連帯を昂めることにあると推察される．

資源保有国であり　かつ　いわゆる発展途上国と見なされているこれらの国々の発展のために　先進諸国が可能な限りの援助を行なうことはむしろ当然のことであろう．　しかし　このハイウエイ建設に関与する先進諸国が　果して　援助の段階で満足するかどうかは　今のところよく判らない．　このハイウエイ建設への投資を上回る何かをある先進国が計算し期待しているとしたらあるいは　国によっては独立以前に似た世情に再び戻らざるをえなくなるかもしれない．　このハイウエイ建設の構想が打出されて既に4年を経た現在　アフリカ諸国の情勢は急速に変貌しつずけており　局地的な騒ぎは絶えないどころか　益々激化してゆく気配さえ感じられる．こうした騒ぎは　果して　その国自体の事情だけで発生するものだろうか？　　バンガツソウの町へ入ってからは　アフリカ横断ハイウエイ建設にからむ先進諸国の思惑を察するあまり　つい　町の様子に気を配らずじまいになった．

国道に面して建つ大きな平家建の県庁（第11図）の前を通り　素晴らしいマンゴの並木道（第12図）を2kmばかり北へ行くと　市街を一望に見下ろす丘の上に　美しい白亜の県知事邸が建っている．



第9図　キチカの渡し　　この国では大都市の一つである　バンガッソウに近いせいか　動力付きのフエリーが使用されている　　雨期には　坂の上端部付近まで水位が上る




第10図　延長約7,300kmのアフリカ横断ハイウエイ計画（太線）

私達は　バンガツソウに到着してすぐに　この邸に挨拶に伺ったが　県知事は留守であった．　ジュータンを敷きつめた広い応接間の片隅にはホームバーがあり　壁には　珍しい動物の剝製や毛皮が飾ってある．　汗とほこりにまみれた作業服を纏った私などが居させてもらうには　余りにも立派な部屋だし　腰を下ろさせてもらうには　余りにも立派な応接セットであった．　しかし　令夫人のいかにも家庭的なおもてなしにつりこまれて　いつの間にか　ためらう気持も失せて　深々としたソファに腰を下ろしていた．　やはり　秀でた人の夫人はいかにも庶民的な何かを　どこかに秘めているものらしい．

冷蔵庫で冷やされたらしいビールが喉を突き刺すようにうるほしてくれる時の感触は　将に　価千金だ．　何しろ　こんなに冷えたビールを飲むのは52日ぶりだし　また　電話を見るのは54日ぶりだ．　やはり　都会での生活は何かと便利である．

宿舎となるホテルは　県庁からほど近く　木立の中に建っている．　電燈もなく　収容人員数は10名ぐらいの小さなホテルではあるが　水のシャワーは使えるし　レストランもあればバーもある．

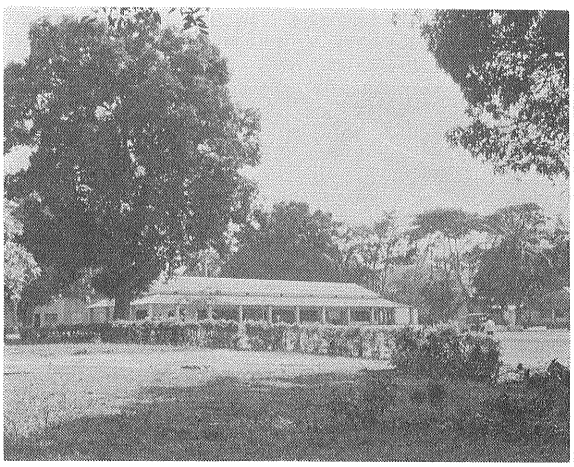
調査旅行に出てから昨日までは　殺風景な宿舎やテントで寝起きし　青臭い川の水でスープを作って飲んでいたせいか　このホテルはまるで天国だ．　私達は　久しぶりに　黒のズボンに白の詰襟の上衣を着たウエイターのサービスで　ビーフステーキの昼食を賞味した．　味は結構だが　肉はやはりかたく　噛み砕くのにいささか骨がおれた．　もっとも　動物の骨さえこともなげに噛み砕くほどの丈夫な歯をもっているこの国の人達にとっては　このかたい肉は丁度食べごろかもしれない．

食事中に　バクウマ郡長のモーリス・スイビイロ氏と遇然に逢った．　聞けば　今日バンガツソウでムボモウ県下のサッカー大会が行なわれるので　選手を引率して今朝6時にバクウマを出発して来たとのことだ．　屋根もないジープとトラックに分乗して　日照りの中を4時間以上も揺られ　休む間もなく試合にのぞむ若人達のたくましさには　学生時代に陸上競技に熱中したことのある私も　驚いた．　バトウカーの話では　小学生の頃学校まで片道10km を走って通ったということだから　彼らにとっては　これぐらいの強行軍は　多分　至極当り前なのだろう．　だからこそ　一向に疲れを見せず激しい試合にのぞむことができるのかもしれない．

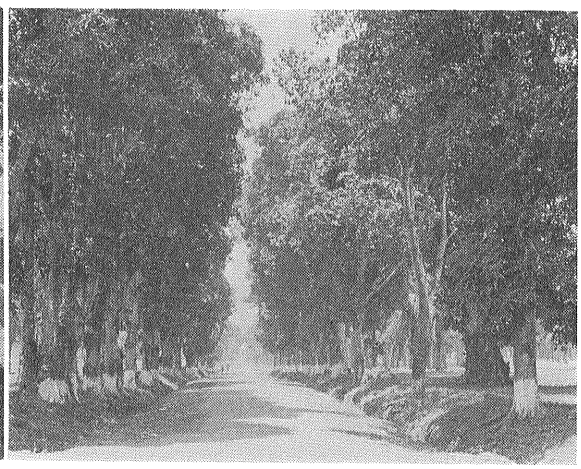
文明諸国のスポーツ選手の中に　このようなたくましさをもっている者がどれほど居るだろうか．　恐らく今日の試合で完敗したとしても　彼等は　口惜しがりそして　次の試合の必勝を期して猛練習に励みこそすれ寝不足だとか　試合場へ来るまでに疲れていたとかなど泣事を云わないだろう．

親切にしてくれたバクウマ郡長の率いるチームだけに秘かに　優勝できるよう　祈っていた．　そして　彼等は　決勝戦で敗れた．　夕方　試合場からホテルに引揚げて来た彼等の表情には　疲れはみられなかった．　きっと　全力を出しきって戦ったことに満足していたのかもしれない．

見なれない女性2人と男性4人のグループが食事に入って来た．　ホテルの玄関前に停めたジープの屋根にガソリンと水の缶を満載しルームにカーテンが取付けられていることから察すると　サファリを楽しんでいる連中らしい．　英語で話していることと顔付から想像するとアメリカ人かカナダ人らしい．　先方は　私達に気付い



第11図　バンガツソウにあるムボモウ県庁　白とピンク色の美しい建物で　マンゴ　椰子　火炎木などにかこまれている



第12図　バンガツソウの県庁付近にあるマンゴ並木　この道を登りつめて　左へ曲った丘の上に　県知事邸が建っている

て　いささか興味をもったらしいが　挨拶を交すこともなかった.

賑わっていたホテルのバーの灯も消え　急に　恐ろしいほどの静けさがやってきた.　久しぶりのホテルのベッドの感触は　やはり　都会へ来た実感を容赦なく押し付ける.　中々寝つけないのは　深い深い森の中から突然に　賑やかな町へ出て来た故だろうか.

### 電燈の灯る町バンバリ

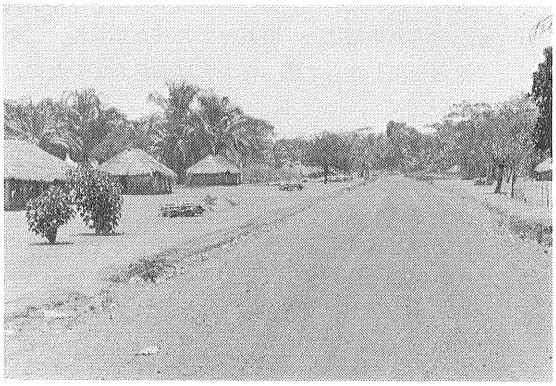
8時に訪ずれた県庁では　紺のスーツを見事に着こなした知事のアドピット氏が　既に　執務中であった.がっしりとした体つきと鋭い眼光と長いもみあげは　将に　戦国時代の野武士の頭領の風格をにじみだしている.身のこなし　話しっぷり　書類の処理の仕方を見ていると　仕事の早い決断力に長けた人らしい.　しかも　中々物腰のやわらかい人である.

8時45分にバンガツソウを出発する.　ムボモウ川に沿う国道2号線は　舗装道路ではないが　快適だし　沿道の家並は中々絶えない（第13図).　煉瓦色に光るラテライトの道と深い緑と萱葺きの低い家が並ぶ風景はどこでも同じだが　珍しく　長方形の家だけが密集する部落が眼に入った（第14図).　部落の背後に見えている山はムボモウ川の南岸に迫るザイル共和国領である.　しかしこの部落が国境に位置しているとはとても思えないほど　静かで平和そのものである.

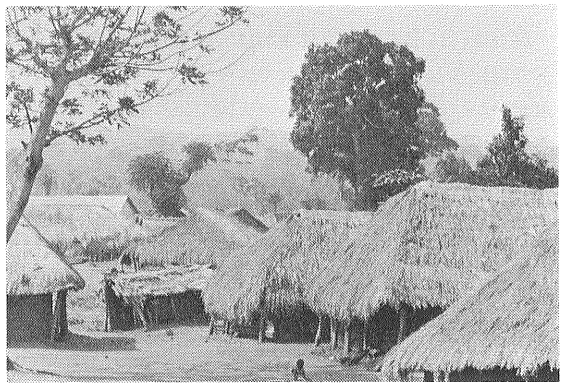
ムボモウ川に沿っていた国道は　間もなく西へ向い密林とサバンナを通り抜けて　やがて　コツトウ川の1支流であるバイキリ川を渡って　広々としたサバンナ地帯に入った.　これからバンギへ帰り着くまでは　もう密林地帯を通ることはない（第15図).

北部地域よりは　やはり湿度が高いのだろう　時速80 km ぐらいで走っていても　むし暑さは相当なものだ.

11時25分　コツトウ川に懸るケンベ滝に着く.　長さ100m ばかりの立派な橋（第16図）からのこの滝の眺めは美くしく　さすがに　この国の滝の中で3指に入るだけのことはある（第17図).　橋から下流の風景は　実に和やかである.　轟音とともに白く激しく落ちる水と音もなく流れてゆく水　そして　それぞれにふさわしい岩場のたたずまい　やはり　人の心を魅了する美しさは



第13図　バンバリ近郊の部落　付近一帯は完全にラテライト化しており　緑と朱とが　美しいコントラストをなしている



第14図　バンガツソウ西方の部落　時にはこのような長方形の家もある.　後方の丘は　ザイル共和国で　この部落との間を　ウバンギ川の上流が流れている

第15図　ゆるやかにうねるサバンナ地帯を走る国道2号線

第16図　コットー川に架かるケンベの橋　コンクリート製で臺奥地で見た橋の中では最高であった　道路は　一級国道2号線

静と動の完全な調和によって　創造されるものらしい（第18図）.

長距離バスが人と荷物を満載してバンガツソウへ出発しょうとしているケンベの町は　思ったよりも小さく街道に面する市場とバスの囲りだけが賑わっていた（第19図）.

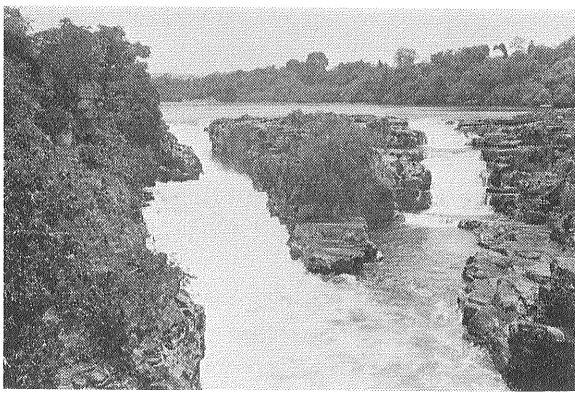
市場で若干の果実を買って出発した私達は　およそ30分後に　コンボ・タペリイに到着した.　ここから国道9号線を66km南へ行くと　同行のアナトールの出身地であるモバゲの町だが　アナトールは　遂に　寄りたいとは云わなかった.

午後2時　陽ざしの強いアリンダオに着く.　バンガツソウから239kmを走って腹をすかしていた私達は　市場で串刺しの焼肉とパンを買い　ささやかな木蔭で　昼食とした.　市場の建物の外観は　ボツサンゴアで見たのと同じく　アラブ風である（第20図）.　この町には多分　アラブ系の住民が多いのだろう.

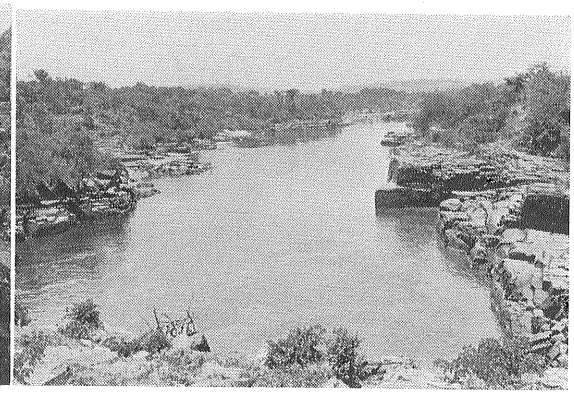
アリンダオの西を流れるバンギケテイ川を渡って間もなく　西の空が急に曇り　叩きつけるような俄雨が降りはじめた.　そして　ムバロト部落にさしかかった頃運悪く　1台の車はパンクし　もう1台は　エンジンの不調で　動かなくなってしまった.　ふだん真面目に働いているのに　よりによってこんな時に動きがとれないとは　天のいたずらも少々度がすぎる.

この付近には蔓類が多いらしく　街道筋には　蔓製の椅子や壁掛を売っている出店？　が点在する（第21図）.椅子の値段は　直径50cmぐらいのものが600フラン（780円）　25cmぐらいのものが100フラン（130円）である.私は　手造りの美しさと　意外な程の頑丈さに魅かれて一番大きな椅子を買おうとしたが　わが家には椅子を使うような場所がないことに気付いて　結局　電話台になりそうな100フランのものを1個買った.

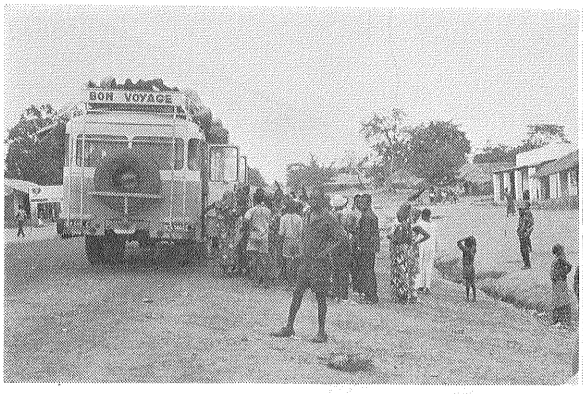
修理が終った時には雨も上っていた.　これから先は密林はおろか高い木立を見ることもなく　ゆるやかにう



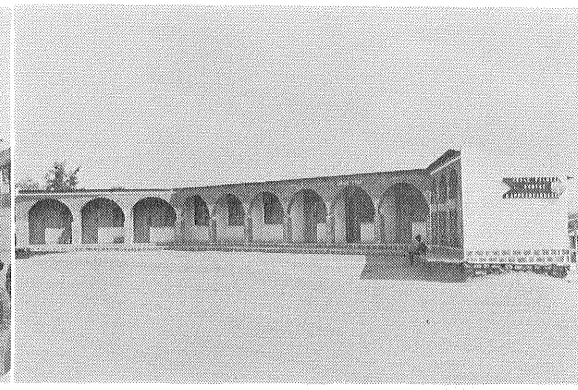
第17図　コットー川に懸るケンベ滝　この国の三大滝の一つとして知られ　観光地となっている



第18図　ケンベ橋からみた　滝の下流のコットー川　地形はゆるやかだが　何となく　日本の結晶片岩地帯の川の風景に似ている




第19図　ケンベの町と長距離バス　長距離バスは　この国では唯一の交通機関となっており　貨客混載である　白衣の男はスーダン系　屋根の上にしばりつけたカゴの中味は　マニオクや鶏が多い



第20図　アリンダオの市場　一見アラブ風の建物で　旅のはじめにボッサンゴアの市場で見たものによく似ている　南部にはアラブ系の住民は　少ないはずなのに　なぜ　このような建物があるのだろう　アラブ進出のころの名残りなのか　アラブ系の住民が多いのか

ねる丘はまるで芝生を敷きつめたようである．　これぞサバンナだ．　旅へ出てからはじめて見る典型的なサバンナではあるが　その美しさと　雄大さを撮影するにはあまりにも暗く　そして　車を停めて眺めるには時間が惜しい．　もうこうした風景を見ることもないと心中残念には思いながらも　カメラを向けることはできなかった．

5時30分　バンバリに着く．　オウアカ川の東側の丘に立体的に拡がる美しいバンバリの中心にある商店街には　電燈がまぶしく灯っている．　町は活気に満ち　市場の規模の大きさと商品の豊かさは　バンギのボカツサ市場に匹敵するほどだ．　オウアカ川の豊かな流れがあり　国道2号線と5号線の分岐点に位置し　この国では珍しい養蚕業が行なわれているだけに　その賑わいも当然だろう．

すっかり暮れた6時過ぎ　町の中心に近いホテルの4号室に入った．　このホテルは狩猟家の宿泊用に建てられたものらしく　入口には　狩猟ホテルと書いた看板が立っていた（第22図）．　建物も中々立派である（第23図）．

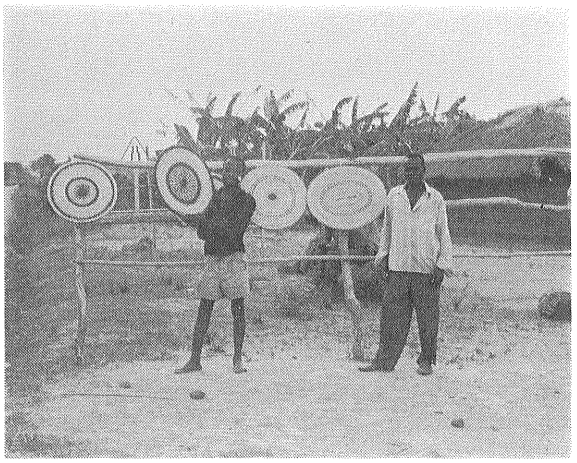
部屋はバス　トイレ付で　電燈はあるし　ベッドも上等である．　長い間こうした部屋で寝起きすることがなかったせいか　部屋の調度品やトイレさえもが　あまりにもぜいたくに思えてならない．

8時　ホテルのレストランで　オニオン・スープ　マカロニ　ペンタード（鶏ぐらいの大きさの野鳥）の焼肉サラダの夕食をとっている時　バンガツソウのホテルで見かけた6人連れが　食事に入って来た．　そして　私達よりも先に出て行ったが　それから10分ばかり過ぎた頃　その中の1人が　血相を変えて　私達の所へ走って来た．

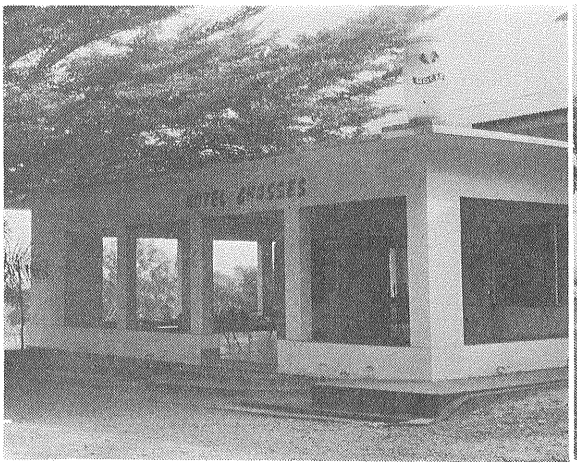
「英語を話しますか？」
「話しますが　何でしょう」
「実は　ここから100mばかりの所で　自動車が転倒しました　助けて下さい」
「行こう」

私達は　一斉に　現場へ走った．　ホテルの入口から50mばかり離れた道路の真ん中に　彼等のジープは見事にひっくり返っていた．　旅行の途中で買ったらしい壺や缶詰や菓子などはほとんどつぶれていたが　6人の誰もが怪我をしていなかった．　不幸中の幸だ．

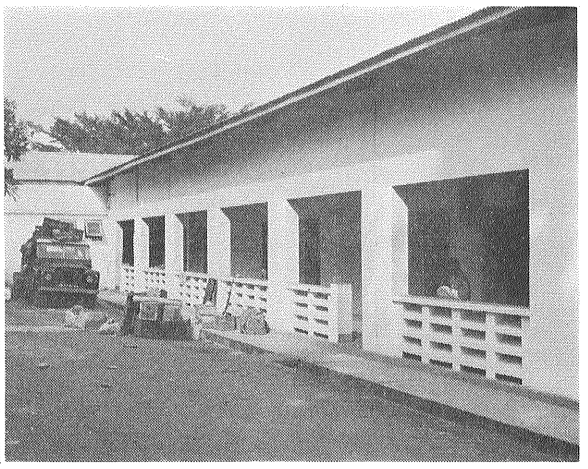
事故を知って集って来た付近の連中と一緒に　車を起した．　肝心なエンジンは快調に始動した．　彼等の安堵した顔が懐中電燈の光に浮び　2人の女性は　急におしゃべりになった．　薬その他何か必要な物はないか



第21図　国道2号線沿いの店　　ツタ製の敷物で　値段は700円前後　単純で素朴な美しさに惹かれて　130円のミニチアを1個買った



第22図　バンバリのホテルの入口　　「狩猟ホテル」の名がつけられ玄関の屋上には　国産ビールモカッフの広告が立っている



第23図　バンバリのホテルと調査用車　　賑やかな町だけに　ホテルも割合にこぎれいで　電灯　シャワーがある　　コックのジュル爺さんは　責任感が旺盛なのか　ホテルの炊事場を借りて　朝

と聞いてみたが　とくにないということだった．　聞けば　サフアリを楽しみにカナダから来た連中で　これからケニアへ行き　ロンドン経由で帰国するということだこの道路は幅５ｍほどで　片側に高さ１ｍばかりの土手がある．　スピードを出せる場所ではないし　土手に乗上げて転倒したことから察すると　どうやら　脇見運転をしていたらしい．　それにしても　無事でよかったバンガツソウから360km走っていささか疲れていたのに中々寝つけず　11時　ワインを多目に飲んで　ベッドに横たわった．

**急拠バンギへ**

７時に朝食をすませて　出発準備が終るまでの短かい時間　ホテルの近くを散歩してみた．　昨夜転倒した車の６人連れは　ホテルの敷地内にあるコテジに泊ったらしい．　このようなコテジは　長旅をする観光客にとっては　野生を満喫し　旅費を節約する意味で　中々便利である．　三方の壁と屋根があるだけで丸見えだが　防虫に気をつけさえすれば　中々ロマンチックな塒かもしれない．　食事を終えたらしい彼等は　私に気づいて威勢の良い声で挨拶してくれた．　皆元気らしい．

ホテルの敷地内にも囲りにも　色とりどりの美しい花が　今を盛りと咲き乱れていた．　しかし　その中で私が知っていたのはハイビスカスだけだ．　自然に親しむ学徒にしては何とも情ない限りだが　何と言っても　ここは中央アフリカである．

８時30分にホテルを出て　市場で若干の買物をした後西へ向って出発した．　天気は上々　ラテライトの道は快適である．　約80km 走ってグリマリに到着した．

道の片側には　果実　野菜　肉などを商う露店に混って　粥を売っている店が１軒あった．　日本の粥よりは米が少なく　むしろ　重湯に米粒が多目に混っているようなものだが　ドンブリ１杯が10フラン（13円）　塩味も中々いける（第24図）．

それにしても　アフリカのこんな奥地に　粥を商う店があろうとは夢想もしなかった．　粥という字は弘法大師がつくったと　少年時代に聞いたことがある．　弘法大師がまだ若い修行僧の頃　訪ずれた農家で粥を出され粥を入れた椀の丁度中程に　縦に箸がおかれていたので椀の縁を弓に　箸を弦に見たてて粥という字を考えついたということだが　サンゴ語で粥のことを何と言うのだろう．

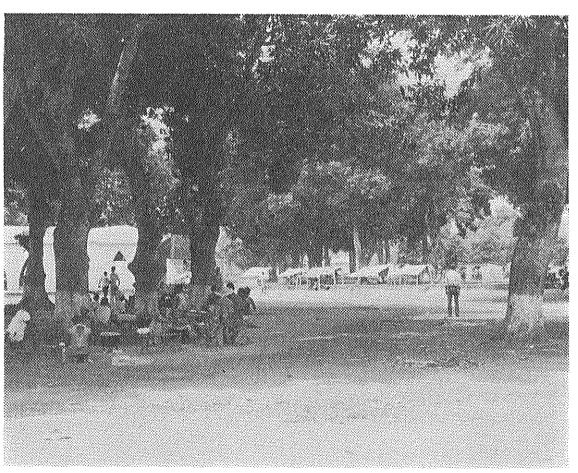
グリマリから 35km のモバジヤ部落で　また　パンクした．　修理は短時間で終りはするが　ここには陽蔭もない．　すぐ近くの道傍に作られた高さ 1.5m ばかりの粗末な棚の上に　仔鹿が１頭転がっている．　このような棚に乗っている物はすべて売物だが　番人が居るわけではない．　仔鹿をのぞきこむ私に気がついたらしく近くの家から　男が小走りにやって来た．　値段は 400 フラン（520 円）ということだ．　同行の１人に「買おう」と言ってみたが　その男は「400フランは高い　先で買った方が安い」と言って　財布に手をかけた私を押しとどめた．　だが　その後鹿を買う機会はなかった．

ケモ・グリビンギ県の県庁所在地であるシブーツに着いた時には　もう２時に近かった．　道路傍の木蔭でバンバリの市場で買った鶏の丸焼とパンを水で流し込んだ後　一休みして出発し　４時10分にダマラに到着した．

ここからボゴアンまでは 44km しか離れていない．バンバリでは　今夜はボゴアンの民家で泊ることを提案した者も居たが　適当な空家がないという多くの意見で結局　ダマラの国営宿舎で泊ることに決めた．　早速郡役場へ行って　宿舎の手配を頼んでみたが　新築中の宿舎は未完成で利用できず　古い宿舎でよければ使ってもよいということだった．　しかし　古い宿舎は　物置として利用されている上に異様な臭で　とても泊れる状態にはなかった．

日没を目前にして困った私達は　翌29日はボガンダ大統領の命日で全国的な休日であると聞かされ　予定を変更して　バンギへ直行し　30日にボゴアンへ行くことに決めた．

ダマラの検問所の近くの道傍には　ささやかな出店があった（第25　26図）．多くはマンゴやパパイヤを商っているが　１軒の店では　大蛇の燻製を売っていた．直径20cm　長さ20cm ぐらいの輪切りにしたもの１片が100フラン（130円）である．　同行の数人が買ったこと



第24図　グリマリの露店　　立ならぶ店の中に　粥を商っている店が１軒あった

から察すると　きっと　美味く　しかも　安いのだろう.

町の人の話しでは　ダマラの近傍では　長さ6～7m程度の蛇が容易に捕まるということだから　この燻製は案外　ダマラ土産として名を売っているのかもしれない.

ダマラからバンギまで76kmの道は完全に舗装されている.　広々としたサバンナも　ゆるやかにうねる丘もそして椰子の林も　間もなく深い闇に閉ざされようとしている.　真黒な雲の縁が金色に輝やきはじめた.　西の空がピンク色から青白く変ってゆく.　日没は目前だ.窓からはみ出した右腕を叩く風が　急に　冷たくなってきた.　人通りはまったくなく　対向車もないバンギへの1本道は　とうとう　暗闇の中だ.

6時20分に鉱山地質局に着き　折良く居合わせた局長のバクポーマ氏にダマラの宿舎の事情を説明した後　ホテルへ向った.

56日ぶりのホテルの明るい部屋　赤いジュータン　熱湯の出る風呂　クーラー　ベッドのヘッド・ボードに組み込まれたラジオから流れる陽気なメロディ　まるで天国にようやく辿り着いた心地である.　風呂の湯は　56日間の汗と垢とで　みるみる中に　どす黒く変った.風呂上りのさっぱりした肌をなでるクーラーの冷たい風が何と心地良く　そして　食欲をそそることか.

だが　財布の中には　ホテルで夕食をとるだけの金は残っていなかった.

さっぱりした気分で　町の食堂でささやかな夕食を済ませ　立寄らざるをえない義理のようなものを感じて顔なじみのニュー・パレス・ホテルでビールを飲むことにした.　財布の中には　1本156円のビールを飲むぐらいの小銭は残っている.　久しぶりに立寄った私達を見つけて　ウエイトレスもウエイターも　笑顔で声をかけてくれた.　日頃親しくしていたバンダ族のモーリスが　私達にとびついて無事を喜こび　ビールを御馳走してくれた.　有難いことだ.

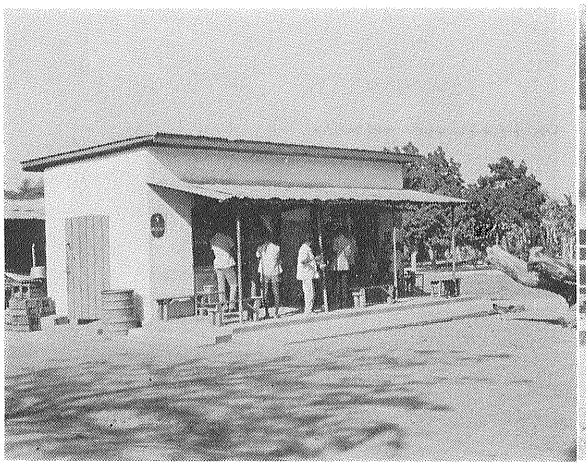
3月29日　ボガンダ大統領の命日にあたるこの日　バンギでは　盛大な催しものやパレードが行なわれることになっていた.　しかし　午前5時頃から降り出した豪雨は正午過ぎまで降り止まず　9時から行なわれることになっていたパレードも催しものも　一切中止となった.まったく残念だ.

## 最　後　の　旅

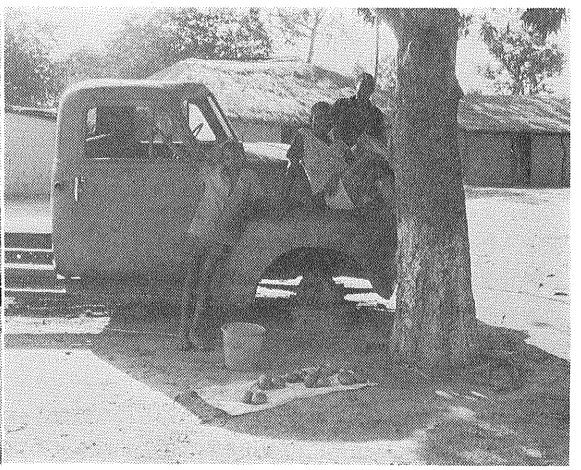
3月30日　いよいよ　調査旅行最後の日を迎えた.財布は空になり　ボゴアンへ向う直前に　銀行に立寄って　ドルを交換した.　1月10日のレートよりは1ドルについて22フラン安くなっていた.

ダマラからボゴアン部落まで44kmの道は　舗装されてはいないが　中々快適である.　ボゴアン部落の南端部から西へ約8km　路面のひどく荒れた道を通って　この国最大の鉄鉱床に到着した.　この付近は小蠅の巣にでもなっているのか　汗ばんだ肌には　一瞬の中に　肌が見えなくなるほど小蠅がたかった.

鉱山地質局で見た鉱床分布図にも　地球化学探鉱の資料の一部にも　この鉄鉱床付近に銅の徴候地が印されていた.　貴重な時間を費やしてわざわざここへ来たのもその異常地付近を概査するためであった.　しかし私達のそうした望は実に呆気なく絶たれた.　同行の誰1人プロスペクターさえも　その徴候地を知らなかったし彼等の誰もが　「銅の徴候地が発見されたと聞いたこともない」と　語った.　それならば　何故　もっと早く教えてくれなかったのか.



第25図　ダマラの店　いわゆる雑貨屋の小さな店だが　冷蔵庫の中には　モカフ（国産ビール）が冷えていた　手鏡やブラシなど商品の多くは　ホンコン製である



第26図　ダマラの街道傍のマンゴ店　この店の近くでは大蛇の燻製を売っていた

調査旅行出発前に提出して承認された旅行日程は　関係者の助言を容れて作成されたものであり　その中にはもちろん　ボゴアン地区の銅徴候地の概査と明記されている．　そして　同行のプロスペクターの１人は　そのコピイを常時持っていた．　しかし　ここでいくら腹を立ててみても　また　いくら残念がってみてもどうしようもないと諦めて　鉄鉱床の露頭を叩きはじめた．

この鉄鉱床もこの国ではもっとも期待されていた鉱床の一つであった．　確かに品位69％の鉱石は魅力ではあるが　残念ながら　経済的開発に価する鉱量はない．

張切ってここまで来たのに　あまりの空しさで　いつにない疲れを感じていた．　張切って来た理由はもちろん　銅徴候地の実体を確認するためではあるが　むしろ私の脳裏には　その徴候地が地質的にどのような位置にあるか　自分の鉱床賦存予測が果して適当であったか否かなどを確かめることができるかもしれないという期待感があった．　鉱床生成図や鉱床分布図が刊行されていないこの国への出発を前にして　私は　150万分の１地質図によって　銅鉱床の賦存予測を試みてみた．

その結果　ンガデの銅鉱床は確かに注目されてはいるけれども　積極的探査や　あるいは　開発の対象となる銅鉱床は　むしろ　主としてコンゴ盆地側に分布する先カンブリ系Ａ中に賦存する可能性が強いと考えた．　この国の先カンブリア系は　下位のＤと上位のＡとに区分されているだけで　時代的には十分な区分がなされていないが　Ａの主要構成岩類とその分布からみて　これを時代的に４区分されているアフリカの先カンブリア系の中部と上部に相当すると一応理解し　とくにＡの下半部は　ガーナ共和国に標式地があり　また　層状銅鉱床を挾在していることで知られている中部のビリミアン系や上部のタークワイアン系下部に　さらに　カタンガ型層状銅鉱床の母層となっている南部アフリカのローン統に対比できるのではないかと考えて　銅鉱床賦存予測の一つの手段としたわけである．

この国へ来て間もない頃　鉱山地質局で見せてもらったきわめて大まかな鉱床分布図の中に銅鉱床の印を見た時　私は　自分の予測が的はずれではなかったと　思った．

銅鉱床の印は　ンガデ鉱床を除いて　どれも先カンブリア系Ａの分布地域内にあり　地球化学探鉱で得られた徴候地を示す．　その一つが　先カンブリア系Ａの分布地域として知られているダマラベーズンの北縁部近くに位置する　ボゴアンの銅徴候地である．

しかし　結局は　その徴候地を見ることもできずにボゴアンを去るほかなかった．　時間的制約をうけている今は　確かに先カンブリア系Ａ中に銅鉱床賦存の可能性があることを知っただけで満足するよりない．　恐らく　ボゴアンの銅徴候地は　火山岩類を主な原岩とする結晶片岩類中に見出されたにちがいない．

ダマラの道路傍の小さな雑貨屋で喉をうるほし　３時10分に出発した．　陽は高く　紺碧の空の下に緑一色におおわれた野や丘は　今日も　変らぬ自然の美しさを見せている．　まったく静かで　平和そのものではあるがその一隅では　疑いなく　野生動物の死闘が行なわれているにちがいない．　いわば弱肉強食の野生の世界は実に残酷そのものとして見なされることが多いのであろうが　それはあくまでも自然の摂理の結果である．

走馬燈のように移り変ってゆく　自然の美しさを見つめ　その中で絶え間なく繰り広げられているであろう動物世界の闘争に想を馳せながら　私は　餌食となるかよわい動物の死を憐れみ　そして　その肉に誇らしげに食らいつく猛獣に憎しみを覚える一方　大自然の恩恵と秩序に依存してしか生きられるはずのない人間が　己の手を汚して　自然の摂理にとめどもなく逆らい続けている現在の文明社会の避けようにも術がないほどの暗いかげりをもつ未来像と自然との調和に生きる人間社会とのあまりにも大きなへだたりに　とまどいを感じていた．誰もが幸福に生きる権利をもつと決めたのも人間ならその幸福を　己の欲望のために　踏みにじっているのも人間である．　しかし　いかに強大な力と経済力をもってはいても　人の心を真に征服することはできはしない．それができるとすれば　それは　人という文字がもつ意味に根ざす純な心だけであろう．

様々な想に耽っているうちに　名も知らぬ灌木が　バンギへの道に　長い影を落しはじめた．　西の果に沈みはじめた太陽には　既に　赤道アフリカに居ることを否が応でも思わせるほどの力は残ってはいない．

人通りの多い夕方５時20分　無事に　ホテルに帰り着いた．　そして　喜こび　悩み　多くの人々の善意に支えられた　57日間にわたる中央アフリカ共和国の奥地における延べ　9,253kmの旅は終った．

## お　わ　り　に

多くの人々の善意と協力を得て無事に終えることができたこの調査旅行によって得られた成果は　一体　何であったろう．　帰国までの短かい夜の一時　一人静かに考えもし　また　旅の途中の出来事を想い浮べてもみた．確かに　サバンナや密林にくまなくおおわれ　さらに厚いラテライトによっておおわれて地質調査や鉱床の発